

## 上高地小梨平キャンプ場ツキノワグマによる人身事故現場検証について(報告)

---

NPO 法人信州ツキノワグマ研究会・NPO 法人ピッキオ  
2020/10/15

※本報告書の無断転載、引用元のわからない形での引用、図表、写真の無断利用および2次的使用を  
禁止いたします。

※本報告書に関するご意見・ご質問に関しましては、NPO 法人ピッキオまで、お問い合わせください。

## 上高地小梨平キャンプ場ツキノワグマによる人身事故現場検証について(報告)

(NPO 法人信州ツキノワグマ研究会・NPO 法人ピッキオ)

2020年8月8日夜間に上高地小梨平キャンプ場で発生したツキノワグマ(以下、クマ)による人身事故について現場検証を行った結果をとりまとめましたので、ご報告します。

1. 視察日時：2020年9月8日11時～15時半
2. 参加者：環境省上高地管理官事務所 2名  
自然公園財団上高地支部 2名  
日本アルプス観光 1名  
NPO 法人ピッキオ・クマ対策員 1名  
信州大学山岳科学研究拠点・NPO 法人信州ツキノワグマ研究会・クマ対策員 2名  
NPO 法人信州ツキノワグマ研究会・クマ対策員 1名  
長野県環境保全研究所 2名  
長野県林務部鳥獣対策・ジビエ振興室 1名

### 3. 概要

(1)人身事故(8月8日)発生までの上高地におけるクマ出没状況

- ・7月26日 ホテルAのグリストラップ、ゴミ箱が開けられる。  
ホテルBの従業員用ゴミ箱を漁る。その後、従業員用喫煙室にも侵入。
- ・7月27日 食堂A、ホテルA、ホテルCのグリストラップが開けられる。  
小梨平キャンプ場食堂・売店のグリストラップと受付前のゴミ箱が荒らされる。  
ケビン宿泊客バーベキュー後の不始末ゴミを漁られる。  
キャンプ場内にトラップを設置、周辺のキャンプサイトを閉鎖(～8月5日)。
- ・7月28日 小梨平キャンプ場食堂グリストラップが開けられたため軽トラで蓋をふさいで対応。
- ・7月28日 ホテルD従業員入口前のマンホールのふたが開けられ、洗面台や浴室などからの生活排水を漁る。
- ・7月31日 ホテルCのグリストラップを開けようとする巨大なクマが目撃される。  
小梨平キャンプ場内でアリの巣を探していると思われるクマを目撃。
- ・8月1日 ホテルEとホテルFで大型のクマを目撃、山荘Aでグリストラップに出没。  
小梨平キャンプ場受付前のゴミ箱が壊される(写真「小梨平キャンプ場」参照)
- ・8月2日 ホテルAの食糧庫と室外機が荒らされる、ホテルEと山荘Aのグリストラップに出没。
- ・8月2～3日 明神池エリア山荘Bに巨大なクマが出没、岩魚の生簀やゴミ箱を漁り、ディーゼル発電機の臭いにも反応(小梨平より約3km奥だが、今回死亡した170kgのクマの可能性もある)。
- ・8月4日 上高地バスターミナル周辺で多くのウッドブロックが剥がされ、蟻を採食したような痕跡が見られた。  
ホテルAのトラップで23時にクマ捕獲、翌日に奥山放獣(大きさから今回死亡したクマとは別)。

- ・8月6日 4日に捕獲されたクマがゴミ箱を荒したクマと判断し、専門家と相談してトラップを撤去、キャンプサイトの一部閉鎖も解除。

なお、上高地周辺でのクマ目撃情報件数をみると、2018年度までは年間50件ほどだったが、2019年度は158件に達し、今年度も同水準で推移していた。2019年度以降は、歩道沿いでの若い個体を含むクマの目撃に加えて、屋外の冷凍庫から食料が持ち去られたり、ゴミ箱やゴミ焼却炉が荒らされたり、グリストラップを空けられたりする事案が何度も確認されていた。これらを受け、環境省上高地管理官事務所では、民間事業施設への施設管理徹底の呼びかけや利用者への普及啓発を前年より強化していた。

#### (2)人身事故発生状況（8月8～9日）→詳細は参考資料①参照

- ・8月8日 未明、クマによるテント食料漁りが発生、午前中にトラップ再設置、テントサイトの一部閉鎖（信州大学泉山茂之教授と相談の上、キャンプサイトの継続を決定、泉山先生が夜間の監視のために事故発生前からAM2時まで巡視・対応）
- ・8月8～9日 21時半頃？クマがテントの上に乗ろうとしてテントがつぶれる。その後、逃げようとしたとみられる個体が、寝ている人の足を踏む事案も発生。23時半頃トイレ前で一人でテント泊をしていた人のテントをトイレ裏まで引きずった後、テントを引き裂いて開けようとし、中に居た女性の足のひっかけ傷を負わせた。なお、食料はすべて食べつくしていた。

#### (3)事故発生時のキャンプ客の反応について

クマの事故発生前後、テント泊の人は400～500人いたが、大きな混乱にはならなかった。これは、就寝中であったということもあるが、人々が騒がなかったことにあると考えられる。

今回の人身事故直前に、テントの上からクマに足を踏まれた宿泊客は、消毒のために事務所を訪れた際、テント内に奥さんを一人残してきており、また、事務所で消毒した後にはテントに戻ったようである。人身事故発生後についても、隣接するテントからは誰も出てこなかったという。

小梨平キャンプ場支配人もその状況には驚いたとのことだが、人が騒いでいれば、2009年に乗鞍で発生した事故のようになっていた可能性もある。一方、冷静な判断・対応は必要だが、来場者の過度な無頓着さについては、正しい情報発信（啓発活動）が必要ではないかと思う。

#### (4)事故発生前後のクマ捕獲状況

事故発生前後に、以下のとおり、泉山茂之教授によりクマの捕獲・放獣が行なわれた。

- ・8月5日 ホテルA 67kg オス、推定年齢10才（放獣）
- ・8月7日 徳沢エリア山荘C 47kg オス、推定年齢5才（放獣）
- ・8月13日 ホテルA 170kg（推定）オス、推定年齢15才（死亡）
- ・8月18日 徳沢エリア山荘C 28kg メス、推定年齢2才（放獣）

#### (5)死亡したクマについて

8月13日朝に麻酔による捕獲を試みたが、その後、死亡が確認されたクマは以下のとおり。

- ・オス、推定体重 170 kg、頭胴長 1.4m（通常よりもかなり大型、人為的食物に餌付いたことが原因かもしれない。ただし、後述のように今年の夏から餌付いたようなので、これほど短期間で太るかは不明）。
- ・歯・頭骨から高齢のクマと推測（長野県環境保全研究所の年齢査定により 21 歳±1 歳程度）。
- ・体毛と胃内容物からの食性分析は、森林総合研究所（つくば市）で行った。

**胃内容物：**レジ袋、ジップロックの破片、円筒形紙パック、アルミホイル、白い脂のような塊（白い脂は分析が必要だが、それ以外はいずれも人為的食物に由来）。

**体毛安定同位体分析：**昨年～今年夏前までは自然の中で採食していたが、7月下旬ごろから急激に人為的食物に餌付いたと考えられる。

#### (6)現場での対応

現場では、環境省や施設管理者等により、すでに以下の対応がなされ、9月7日以降、キャンプサイトの一部が再開されている。

- ・キャンプ場利用客や観光客向けの講習会の開催
- ・キャンプ場内でのササの刈り払いによる見通しの確保
- ・食糧はテントに置かず、18時までに食堂で預かる
- ・ゴミ箱を置く時間を5時半～19時に限定

#### 4. 今後のクマ対策について

視察中や意見交換会で専門家のみなさんから以下のような意見があった。

##### 【生態について】

- ・クマの以下のような生態（参考資料②参照）に即した対策が必要
  - ✓広い行動圏をもち（オスの行動圏はメスの約5倍：中央アルプス北部地域の事例）、なわばりがなく、採食物が豊富な餌場（人為的食物では、トウモロコシ畑、残飯、ゴミ等）があれば何頭ものクマが集まってくる可能性が高い。
  - ✓人里を含む地域に生息するクマは、夏季（7月～9月中旬）に最も人里周辺や林縁を利用する（昆虫類・サクラ類などの主要な夏の食物が、山岳部では乏しく、人里周辺や林縁に多いことが主な要因。ただし、北アルプス地域では夏季に高山帯を利用するクマが生息する）
  - ✓ただし、堅果類（ドングリなど）が不作の年は、8～11月頃まで出沒が例年より多くなる。
- ・クマは1日数kmの移動を行うことがある。小梨平から明神橋までの直線距離は約2.5kmであり、同一個体が利用する可能性は十分ある。
- ・クマの出沒が全県あるいは全国的に増えているが、この傾向は今後さらに続くと推測される（参考資料③参照）。従って、人為的食物に餌付くクマを出さないことがますます重要。
- ・亜成獣個体が人に頓着せず行動する事例がときどきあるが、出生地からの移動である分散途中の個体の可能性が高く、このような個体の出沒は一時的と考えられる（2ヶ月前後で他の場所へ移動することが多い）。人身事故等の危険が察知される場合は奥山放獣が必要。

##### 【クマの出沒情報について】

- ・目撃情報が増える夏季（7月）以降は常にクマの情報収集に努め、人為的食物（雑排水、ゴミ、残飯等）

に餌付く兆候がみられれば、**早急**に対応をとる必要がある。

- ・ 出没情報把握するため、頻繁にクマが目撃される場所やクマによる被害（グリーストラップ、ゴミ箱荒らし）があった場所に、速やかに**1ヶ所あたり複数台のセンサーカメラ**を設置し、個体情報を随時確認する。個体サイズ、出没頭数等のモニタリングをすることが可能であり、必要に応じて情報公開し、観光客や登山客に周知する。なお、出没情報や被害等があった際には、今後の対策に有効な情報をえるために、直ちに現場調査することが重要。

#### 【餌付かせないための対策】

- ・ **「クマは一度でも人為的食物を採食すると、繰り返し人為的食物を採食してしまう。」**このことを関係機関、施設管理者が共通認識として強く意識することが必要。具体的な対策は以下が考えられる。
- ・ グリーストラップの蓋を完全に開けられない構造に変更（軽井沢町の先行事例＝参考資料④を参照）。
- ・ キャンプ場でのフードロッカーの設置の必要性（軽井沢町の先行事例＝参考資料⑤を参照）。
- ・ クマが開けられないゴミ箱の検討（軽井沢町の先行事例＝参考資料⑥を参照）。
- ・ クマスプレーの活用（軽井沢町の先行事例＝参考資料⑦を参照）。

※上高地より奥の場所を含む地域内の全施設で誘引物の点検と対策を実施。

※キャンプ場の事故防止のために、「テントサイト」、「食事・炊事場」、「フードロッカー」を適切な距離（それぞれ 60m 以上、できれば 100m）で配置（北米の国立公園における対策）。

#### 【普及啓発】

- ・ 上述した、クマの習性を含めた基本的な生態、具体的な対策等について、関係機関、とりわけ接客を担う**キャンプ場や旅館管理者を対象に1年に少なくとも1回（できればシーズン開始前）はクマに関する勉強会を開催する**（講師は、例えば信州クマ研・ピッキオなど）。
- ・ 「上高地にはクマが生息する」ことを観光客に周知することを兼ねて、園路などに音のなる工作物を設置してはどうか（烏川緑地のような鐘やトライアングルなど）※普及啓発と兼ねられると考えられる。
- ・ バス、タクシーなどでの普及啓発（アナウンス、座席への資料設置など）。
- ・ 上高地がクマの生息地であるという広報スタンスへの転換。
- ・ 各テーブルの注意喚起（現在は「餌をやらないで」のみ）を「上高地 5 つのルール」に変更（もしくはゴミの管理の文言のものを追加）。

#### 【人材確保】

- ・ これほど多数の観光客や登山客が入り込む上高地において、これまでクマによる人身事故が発生しなかったことはむしろ注目に値する。これは、これまで長年にわたって、上高地でクマの出没等が発生した場合、泉山教授が対策の指導と奥山放獣を行ってきた成果の一つと考えられる。また、近年は自然公園財団による野生動物専門員が配置され、クマをはじめとした野生動物と観光客との関りについて監視が行われている。
- ・ しかしながら、近年の県内のクマ放獣対応件数の激増もあり、泉山教授 1 人による上高地におけるクマ対応には限界が生じていると考えられる。今後、**上高地独自でクマの専門知識と奥山放獣の技術をもつ人材の確保を検討する必要がある**。

### 【県内 NPO 法人や研究機関との連携】

今回起きた人身事故を契機として、人間由来の食物に餌付かせないための対策、クマの生息地における適切な行動についての普及啓発など、人間側の対策を主軸にしながら、人の存在を気にしない若いクマや餌付いたクマの特定や行動追跡、追い払いなど、捕獲以外のクマ側の対策にも踏み込んでみるのはいかがでしょうか。これらの対策は、これまで当地域のクマ対策を担ってきた信州大学泉山茂之教授の他、ツキノワグマの生態や被害対策に関する専門知識を有する県内の NPO 法人である信州ツキノワグマ研究会やピッキオ、さらにはクマのサンプル収集と分析を行っている長野県環境保全研究所とも連携しながら行うことを提案する。

### ●信州ツキノワグマ研究会としてできること

信州ツキノワグマ研究会としては、主として普及啓発や事故を未然に防ぐための施設管理者との相談窓口となることが考えられる。現地の関係者にクマの生態や対策について正しい情報を知ってもらうために、定期的な講習会を引き受けたり、気軽に相談できる窓口として協力することが可能である。また、一般の来訪者は基本的にはバスかタクシーで上高地に入るため、バスターミナルや車内でのアナウンスや資料提供でクマ対策の情報を伝えることができるが、その資料作成などについても相談に応じることができる。クマの被害発生時には速やかに現場検証し、関係機関と連携しながら今後の対策を提案していきたい。

### ●ピッキオとしてできること

不特定多数の方がクマの生息地を利用するという点で、上高地は軽井沢町と似ている。これまでに同町で実施してきた、食料やゴミの管理、環境整備、クマ情報の収集体制、利用者への呼びかけなどの具体例を参考にさせていただければと思う。一方で人間側の対策を徹底しても、若いクマを中心にして、人間との距離が近い個体は次々に生まれてくることが予想される。軽井沢町で行ってきた問題個体の特定と行動矯正のための作業は、上高地で人とクマの適切な距離を保つためにも応用できるのではないかと。ベアドッグによるパトロールは、クマに人との適切な距離感を教えるための手段となりうる。

### ●長野県環境保全研究所におけるサンプル収集

長野県環境保全研究所では県野生鳥獣被害対策本部による依頼および研究のため、県内で捕獲されたクマのサンプルを収集し分析を行っている。森林総合研究所など他の研究機関の協力も得て、以下のような分析を行っており、今後、上高地で捕獲されたクマについてもサンプルが収集されれば（放獣個体であれば、歯と体毛の採取）、クマ対策のための参考資料として役立てるとともに、特定鳥獣保護管理計画や対策マニュアルなどに反映させることができる。

#### 【基本的な分析】

- ・頭骨：形態分析
- ・歯：年齢査定
- ・体毛：安定同位体による食性分析（自然の食物か人為的な食物かを判定、またその季節変化）

#### 【必要に応じて】

- ・胃内容物：死亡直前の食性分析
- ・肉片など：DNAにより遺伝的多様性、雌雄判定、血縁関係などの分析
- ・メスの場合：年齢査定に基づく、繁殖履歴の解明

写真 小梨平キャンプ場



## 8月8日上高地小梨平キャンプ場人身事故状況

(小梨平キャンプ場の資料より引用)

- ・8月8日(土)未明、クマによるテント食料漁りが発生した(Dサイト)。親子3人が就寝中のテント1張りが襲われ、中のリュックが外に出され食料が食べられた。人的被害はなし。このため(4日に捕獲された個体とは別個体と推定)、午前中に再びワナを設置しキャンプサイトC、D一部閉鎖。
- ・専門家と相談の上、人を見れば逃げる個体であることから人身被害の可能性は低いと判断し、キャンプ場内の管理体制を強化(専門家もキャンプ場に待機)し、利用を継続。
- ・当日夜間、専門家に夜間監視をお願いし、クマが出没した際に迅速な対応を可能にした。
- ・ワナの近くのテントサイトC、Dの一部を閉鎖(ロープを張り受付で注意喚起した)。
- ・クマが出没しているので、なるべく笹から離れてテントを設営するようお願いした(当日の未明の事故の話はしていない)。
- ・ゴミの処理、食料管理、夜間の外出の注意喚起は通常通り実施。

8月8日(土)午後11時30分頃キャンプ場Bサイトに大型のクマが出没し、トイレ前の角に当たる場所に設営した一人用テントを人気のないところまでひきずったのちに、テントを引き裂き、中にいた利用者をひっかけ、足にけがを負わせ、食料を食べつくすという事故が発生した(右ひざ下内側を10針縫う)。救急車を要請する。

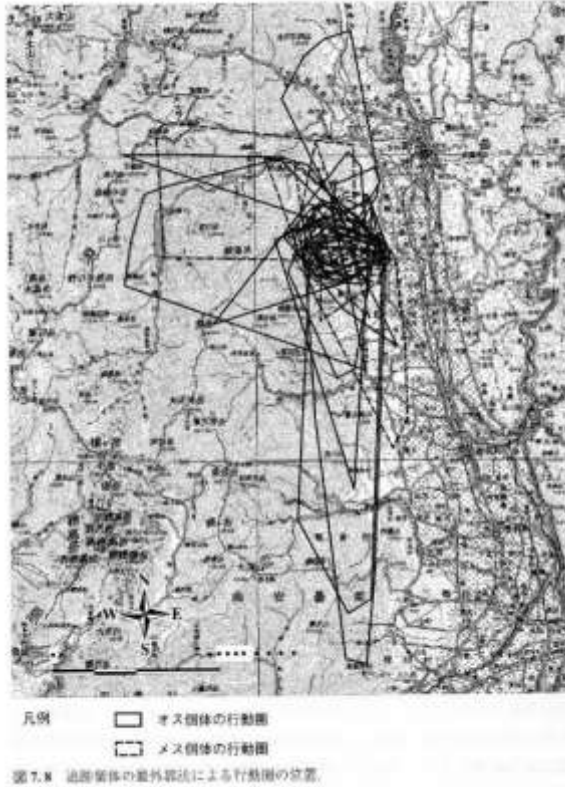
・夜間のライトが無い中での無理な避難は、当日利用者が多い状況を踏まえると、混乱する可能性があったため実施せず、専門家との監視体制強化にとどめ、夜明け以降キャンプ場閉鎖を伝えるとともに、夕方までのテント撤収を利用者に伝え、夕方までの撤収完了。8月9日(日)未明までの間、人身事故1件、テント被害4件、タープ被害1件発生する(Eサイト午後10時30分→Fサイト午後10時30分→Bサイト午後11時30分→Iサイト9日午前4時の順)。キャンプ場内のカラマツの根元で休息する大型のクマが確認されたため、麻酔銃による捕獲を試みるが失敗。それ以降キャンプ場を閉鎖。



参考資料②-1

ツキノワグマの基本的生態について

(1) ツキノワグマの行動圏



泉山茂之(2011)  
高山帯・亜高山帯の利用 北アルプスに生息するツキノワグマの生態. 「日本のクマ ヒグマとツキノワグマの生物学」(坪田・山崎編)pp.209-238.

ツキノワグマは広い行動圏を持ち、行動圏は互いに大きく重複してなわばりを持たない。

(図：泉山茂之氏提供)

行動圏の大きさ

性別	平均	範囲
メス (N=14)	25.06 km <sup>2</sup>	( 9.16～ 57.08 km <sup>2</sup> )
オス (N=15)	147.49 km <sup>2</sup>	(34.11～285.18 km <sup>2</sup> )

Takahata *et al.* 2017 調査対象個体 29 頭の春～秋の行動圏サイズ(Season-Specific Habitat Restriction in Asiatic Black Bears, Japan;JWM)より引用

参考資料②-2

(2) 人里近くに分布するツキノワグマの夏季の好適生息地

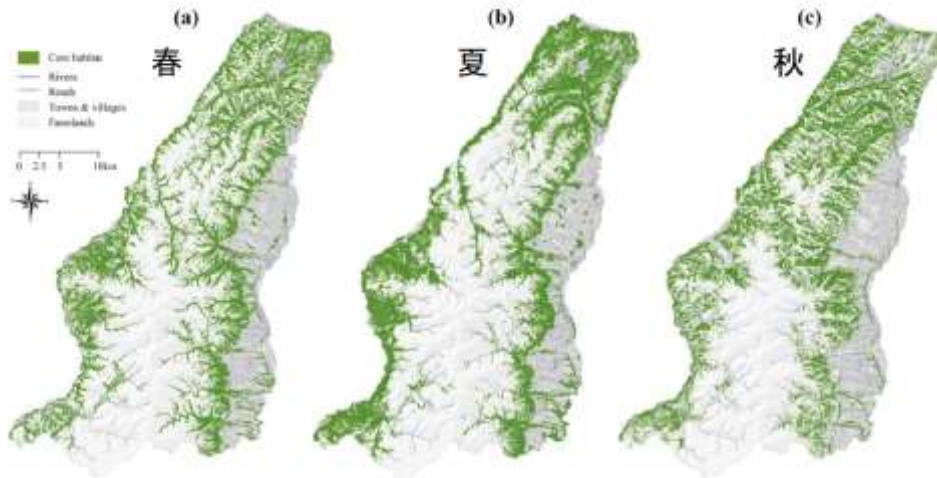


Figure 3. Spatial distribution of core habitat for male Asiatic black bears predicted by resource selection functions (RSFs) in spring (a), summer (b), and autumn (c) based on global positioning system data collected during 2009–2012 in the central Japan Alps region. Areas of green indicate core habitat defined by higher RSF values.

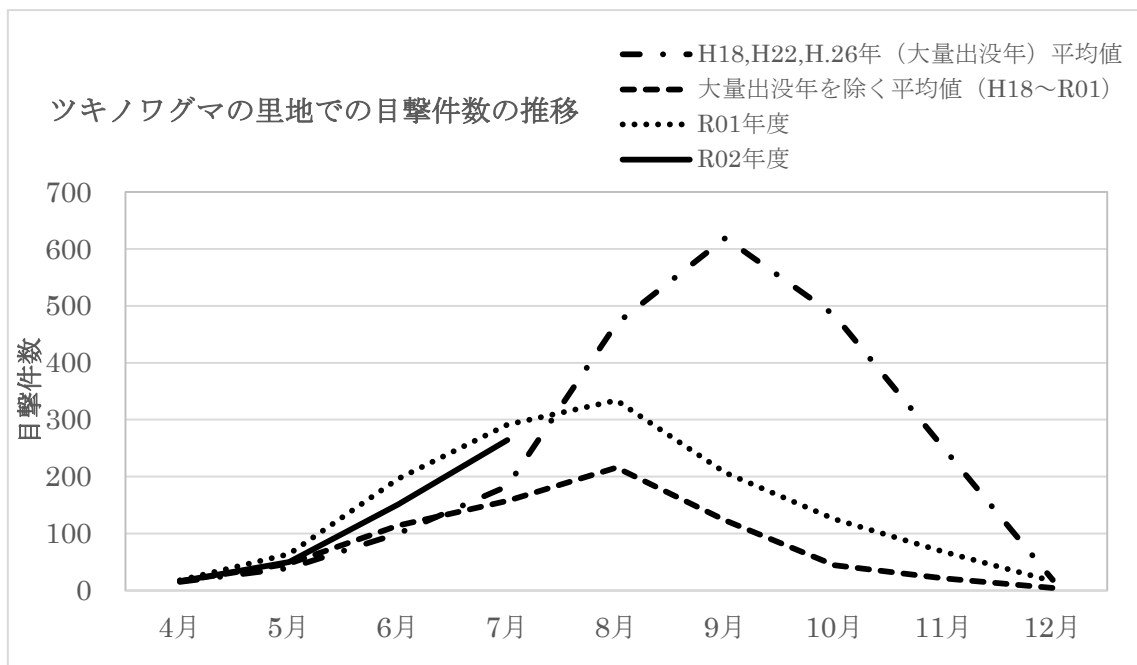
Takahata et al. • Seasonal Habitat Quality Dynamics for Bears

1261

中央アルプスの生息地の研究例では、ツキノワグマは夏に低標高の人里近いエリア（図の緑色の部分）を利用する可能性が高いことが判明している。（図：高島千尋氏提供）

Takahata et al. 2017 対象個体 29 頭の GPS データから推定 (Season-Specific Habitat Restriction in Asiatic Black Bears, Japan; JWM) より引用

ツキノワグマの里地での目撃件数の推移



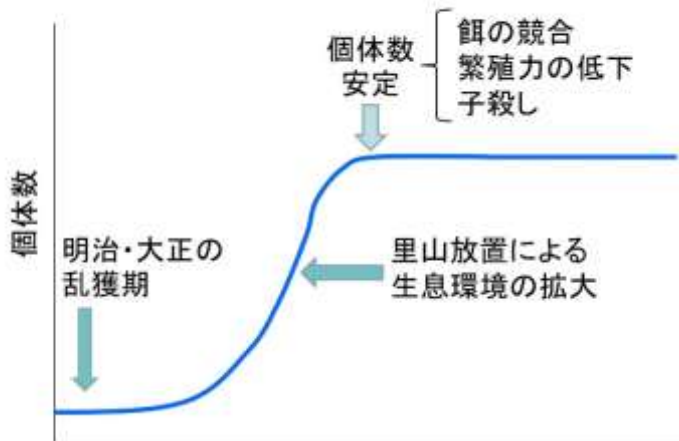
ツキノワグマの人里での目撃件数は7~9月に多くなる。これは、春は植物が芽吹き、秋は堅果類（ドングリ）が実るために山でクマの食物は多いが、夏はその端境期で山の餌が少なくなることが一つの原因である。ただし、堅果類が不足の年は大量出沒が起き、8~11月までの目撃件数が、例年より顕著に多くなる。（長野県ホームページより引用）

参考資料③

ツキノワグマの個体数変動の模式図

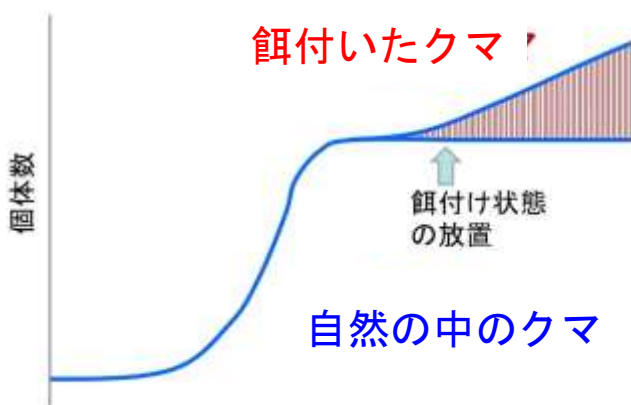
ツキノワグマの推測される個体数変動の模式図です。実際には検証する必要がありますが、なぜ近年はツキノワグマの出没が多くなったのかをイメージしてもらうために示しました。(岸元良輔)

ツキノワグマの個体数推移の模式図①



ヒグマやアメリカクロクマでは、生息環境の餌量に合わせて生息数がほぼ一定になることが知られています。ツキノワグマでも同様のことが考えられます。明治・大正・昭和前期は野生動物が乱獲されたり山の開発でクマの個体数が減少していたと考えられます。近年は狩猟数が減ったことや、里山が放置されてクマの生息地が低標高に広がったために個体数が増え、里山や上高地のような奥山でも個体数が安定してきたと推測されます。

ツキノワグマの個体数推移の模式図②



このような状況で、クマが生ゴミなどに餌付く状態を放置したまま何の対策も取らなければ、栄養状態がよくなって「餌付いたクマ」が増えるばかりになります。特に上高地のような環境では、人為的な食物に執着する「餌付いたクマ」をつくらず、「自然の中のクマ」で個体群を安定させることが重要と考えます。

## 参考資料④

## グリストラップの蓋を完全に開けられない構造に変更

グリストラップの目的は、油脂分やくずが流れ出さないよう一時的に溜めることにあり、蓋が容易に開いてしまう場合は、クマを引き寄せる要因になってしまう。軽井沢町では役場などが、配管の詰まりの防止の観点からできるだけ油脂分を下水に流さないことや、定期的な清掃を指導している。点検や清掃がしやすく、かつ、クマに開けられないようにする方法として簡便なのは、蓋と本体を万力で固定する方法である（写真1）。ただし、グリストラップが老朽化していて縁が壊されてしまったこともあり、本格的な工事を行える場合は、L字鋼をボルト止めするのが良い（写真2）。この方法はマンホール型にも有効である。ただし、今後は最初からクマに開けられない構造のグリストラップの開発と普及が望まれる。



写真1. 蓋と本体を小型の万力で固定



写真2. L字鋼をボルト止め

## 参考資料⑤

### キャンプ場でのフードロッカーの設置の必要性

軽井沢町のキャンプ場では 2000 年代はじめにクマがゴミを漁るという事例が発生したため、トラックのコンテナ部分を食料およびゴミの保管庫として利用し始めた（写真 1）。周辺のやぶ刈りなども合わせて行い、現在では、周辺にクマは生息しているものの、ゴミ等に餌付くなどの問題行動をとるクマは確認されていない。

北米や知床のキャンプ場では、クマ対策の観点からテント内に食料は持ち込まないことや、テントと炊事場、食料・ゴミの保管場所は 60m 以上離すこと、もしくは高い木にロープを張って食料量を吊るすことが推奨されている。また、クマに開けられない携行用のフードコンテナも普及している。



写真 1. トラックのコンテナを利用した食料・ゴミ保管庫。比較的安価（10 万円程度）で入手できる

## 参考資料⑥-1

## クマが開けられないゴミ箱の検討

軽井沢町では1990年代後半から2000年代前半にかけて、ゴミ集積場でクマによるゴミ荒らし被害が頻発し、100件以上確認される年もあった。ピッキオでは三精工業株式会社（富山県）と共同で、北米の国立公園でのゴミ箱を参考にしながら、クマに荒らされないゴミ箱の開発に着手し、2003年に試作品が完成した（写真1）。2004年から公共のゴミ集積所を中心に導入され、現在までに軽井沢町内の公共ゴミ集積所に31台、民間の宿泊施設や飲食店に15台、北海道のキャンプ場と保育所にそれぞれ5台、1台が設置されたが、残念ながら現在は製造中止となっている。

軽井沢町内でのゴミ集積所被害は2009年に0件となり、その後も年間0件から数件にとどまっている（図1）。なお、クマ対策ゴミ箱が荒らされたことはなく、数件の被害は他のタイプのゴミ箱や適切に捨てられなかったゴミに対して発生したものである。

そのほか、施設によってはゴミ・食料保管庫として頑丈なコンテナを利用したり、物置型のゴミ箱の扉とレールを強化したり（写真2）、ゴミ箱に錠を付けたりにしている（写真3）。ゴミ収集の方法を変更し、屋外でのゴミ保管につながる個別の別荘でのゴミ収集をやめて、別荘管理事務所に備え付けの対策済みのゴミ箱を使用するようにしたところもある。



写真1. のぼりべつクマ牧場での試験風景。においが漏れにくく、爪がひっかからない。クマはとってを操作できない

参考資料⑥-2

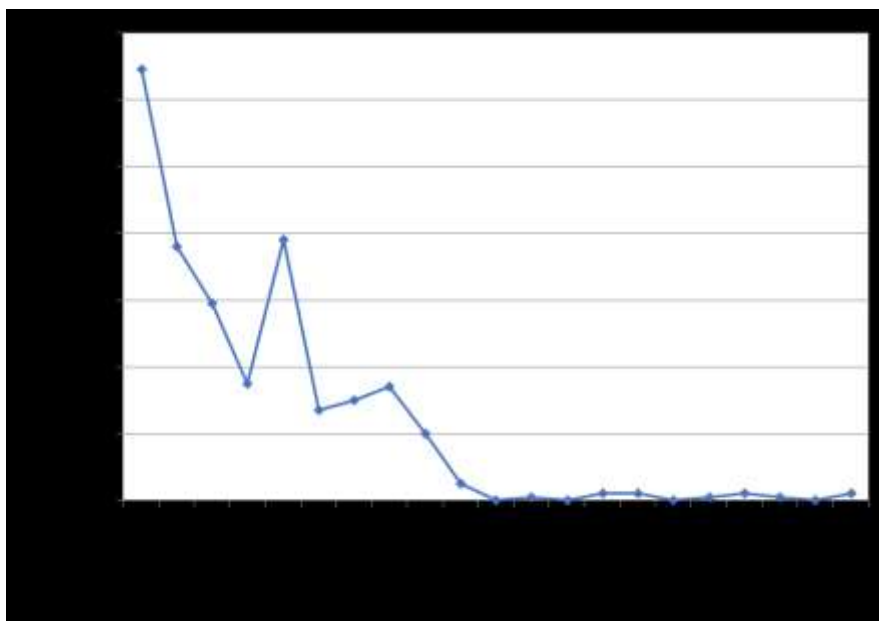


図 2. 軽井沢町内におけるゴミ集積所でのクマによるゴミ荒らしの件数  
(平成 31 年度軽井沢町ツキノワグマ対策事業報告書より引用)



写真 2. 物置の扉とレールを強化した例 (左：対策前、右：対策後)



写真 3. 扉に取り付けた錠の例

## 参考資料⑦

### クマスプレーの活用

人間由来の食物やゴミなどに餌付いたクマがその場所に来ることをあきらめさせるために、唐辛子エキスをスプレーするものである（写真1）。クマが得られるものが他にないことを前提にして用いる。軽井沢町周辺では、牧場の給餌場、ゴミ箱、グリストラップで、クマを来なくさせた例がある（写真2）。



写真1. クマが餌を引っ張ると唐辛子エキスがスプレーされる



写真2. 餌を引っ張ったクマ